古代寺院研究上の問題点

森　郁夫

はじめに

わが国における古代寺院造営の研究に関しては、解決しなければならない多くの問題点がある。京都国立博物館在任中『学叢』に古代寺院に関するいくつかの論攷を発表したが、いずれも主題のすべてを述べたものではないし、疑問とするいくつかの課題を残している。また、その後に発表したものの中には「問題点」あるいは「諸問題」を主題に加えたものもある。この研究随想では、そうしたもの中から今後解決しなければならない問題点をいくつかあげてみようと思う。

1　小山廃寺の性格

『学叢』八号で「古代山背の寺院造営」の主題で一文を発表した。[1]その中で問題点として残ったのは、山背国では雷文縁軒丸瓦をその所用瓦とする寺が特定の郡に限られ、しかも雷文縁軒丸瓦は小山廃寺に初源が求められるものとしながら、その小山廃寺の性格に論究できなかったことである。

小山廃寺は、奈良県橿原市木之本町と高市郡明日香村小山にかけて所在する古代寺院遺跡である。この寺跡は従来「紀寺跡」と考えられていた。その根拠は寺域内に「キテラ」の小字があることによっている。この遺跡は昭和四十八年から四次にわたって発掘調査され、中門から発した回廊内に金堂があり、回廊は講堂の両妻に取り付き、南門と大垣は藤原京八条大路に面していることが確認された。[2]

この寺での創建時の軒瓦は雷紋縁軒丸瓦と重弧文軒平瓦である。この寺の雷紋縁軒丸瓦は初源的紋様構成をもち、従来「紀寺式軒丸瓦」と呼ばれていた。雷文そのものは特殊な文様構成であり、年代の決め手とするには難しい面があるが、小山廃寺出土雷文縁軒丸瓦は中房の蓮子が整い、内区の蓮弁の様相はきわめて均整がとれている。また、外縁は七世紀後半代の代表的な軒丸瓦である川原寺創建時の軒丸瓦や、法隆寺西院伽藍創建時の軒丸瓦と同様に傾斜縁に作られ、そこに雷文がめぐらされる。一見して小山廃寺出土雷文縁軒丸瓦より後出的な蓮弁を瓦当面に飾る河内葛上廃寺の雷文縁軒丸瓦

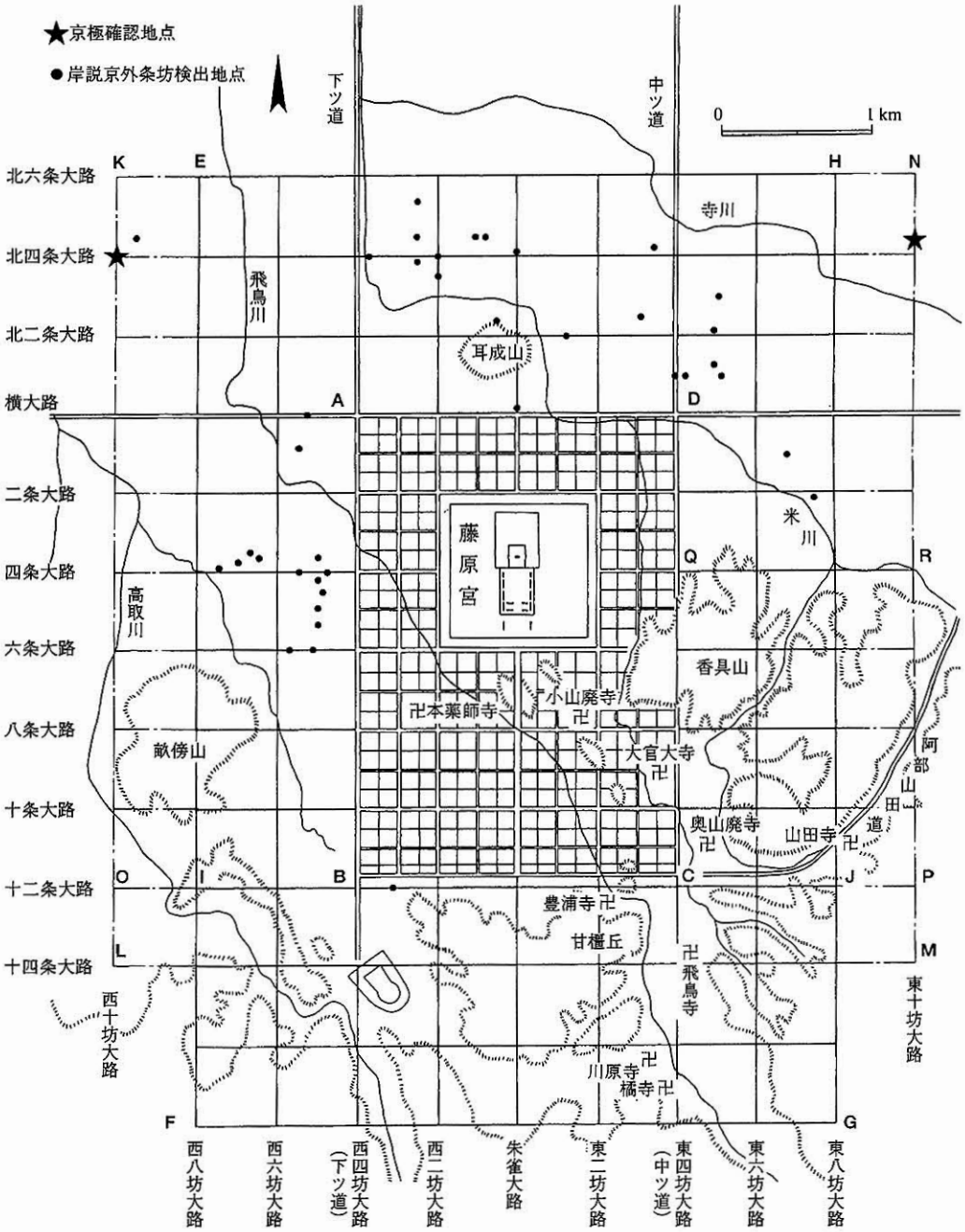
では、外縁は直立縁で外縁と弁区との間に平坦面を設け、そこに雷文をめぐらせる。こうした例からすれば、傾斜縁に雷文をめぐらせるものは川原寺や法隆寺西院の創建期に近い頃に属するものと言えよう。

雷紋縁軒丸瓦は稠密な分布を示すわけではないが、東は東北地方に、西は山陰地方にまで見受けられる。そして畿内では山背地域で特異な分布状況を示している。山背地域では七世紀後半に寺院造営活動が盛んになるのであり、その際に用いられた軒丸瓦は川原寺式と紀寺式軒丸瓦、すなわち雷紋縁軒丸瓦なのである。そしてその分布は郡単位で両者の分布が異なるのである。川原寺式軒丸瓦は相楽郡と久世郡とに集中的に分布し、雷紋縁軒丸瓦が用いられるのが宇治郡・紀伊郡・愛宕郡に限られるのである。

こうした状況は、山背国で寺院造営事業が進められた際に、官による技術援助があったと考えられるのである。仮に小山廃寺が紀寺であったとするならば、紀氏が掌握していた技術が山背各地にもたらされたことになる。壬申の乱に将軍として活躍したと思われる紀朝臣大人、また政権中枢部で活躍した紀朝臣麻呂のような者の名も正史に見えるが、紀氏の勢力がこの時期に東北地方から山陰地方にまで、広い地域に影響を及ぼせるほど大きかったとは考えられない。また小山廃寺が紀寺、すなわち紀氏の寺であるならば、紀伊国に雷紋縁軒丸瓦が見られるはずである。しかしながら、まったく雷紋縁軒丸瓦は見られない。したがって、雷紋縁軒丸瓦の分布の状況は、川原寺式軒瓦や法隆寺式軒瓦の分布に見出されるような意義を求めねばならない。川原寺と法隆寺はこの時期、明らかに官が掌握する寺であり、この系統の軒瓦が全国に見られるあり方は、官の影響の現れであることが理解されるのである。

そこで問題となるのは、小山廃寺が官に関わる寺であるとしたならば、具体的な寺名をあげねばならないことである。小山廃寺の雷紋縁軒丸瓦は七世紀第Ⅲ四半期末頃の製品とすることができる。その時期に朝廷が直接造営した寺は、大和においては十市郡に建立され後に高市郡に移された百済大寺の後身である高市大寺と川原寺の二か寺である。川原寺は斉明天皇の菩提を弔うために天智天皇が発願したものであり、現在も明日香村川原の地に法灯を伝えている。したがって、川原寺はその対象とはならない。

百済大寺に関しては、桜井市吉備に所在し平成九年と十年に発掘調査が行われた吉備池廃寺が、その基壇規模の壮大さからそれであるとの見解が強い。その発掘調査の成果では、礎石をはじめとして基壇外装の資材も含めて他へ運ばれた状況がうかがわれ、百済大寺が天武二年（六七三）に大和高市郡に移されたとする『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』をはじめとするいくつかの史料に見える記事に一致するものとして、吉備池廃寺がすなわち百済大寺であるとの見解がますます強くなったのである。[3] したがって、天武二年に高市郡に移建されて高市大寺と寺名が改められた寺が高市郡のどこかに存在するはずなのである。その可能性は、吉備池廃寺と同笵軒瓦が出土する木之本廃寺に求められるのであるが、残念ながら木之本廃寺では遺構の検出が認められなかった。もっとも、木之本廃寺は十市郡内に所在するので、これは高市大寺にはなり得ない。[4] 現在まで、吉備池廃寺との同笵軒瓦が出土する遺跡は高市郡内から発見されていない。これは何を意味するのであろうか。飛鳥地域では発掘調査が絶えず行われているにもかかわらず、吉備池廃寺出土軒瓦との同



第１図　藤原京復元図（Ｋ・Ｌ・Ｍ・Ｎを結んだ範囲が小澤説）

笵品が一点も発見されていない。史料には百済大寺を高市郡に移したと記されてはいるが、実際には寺は移されていないのではなかろうか。このことは、平城遷都に伴って移されたとする大安寺・薬師寺・元興寺のすべてが平城遷都後の新規造営であったことに通ずると考えられるのである。吉備池廃寺において礎石や基壇外装などの資材が他へ運ばれたことに関する考えについては別稿で述べたところである。[5]

百済大寺を高市郡に移したとされながら、その痕跡すらうかがうことができないのであれば、高市大寺が新規造営であった可能性が高い。その理由は文武朝に大官大寺が新たに造営されていることである。高市大寺は天武九年（六八〇）に

大官大寺と名が改められている。したがって、文武天皇即位時には大官大寺は存在していたはずである。しかるに文武朝に新たに大官大寺が造営されているのである。しかもその規模はきわめて壮大なものであった。仮に舒明朝百済大寺が高市郡に移されて天武朝大官大寺となったとしても、建立以来たかだか六十年を経過しただけである。文武朝に至ってその寺が老朽化したために新たに建立したとは考えられない。天武朝大官大寺がその名にふさわしからぬ規模であったための新規造営であったにちがいない。

このように考えてくると、文武朝大官大寺以前に建立された官寺として候補に挙げ得るものは、小山廃寺以外には認められない。さきにふれたように、雷紋縁軒丸瓦の年代からみても天武朝初年に営まれた官寺にふさわしいと考えられるのである。しかし、そのように考える場合、大きな障害となるのが藤原京の条坊に合わせて建立されている点である。藤原京は持統朝に造営されたとの考え方が有力であったが、発掘調査が進むにつれて、近年、それより早い時期に計画されたもの、そして現在定説化している規模よりさらに広い範囲で計画されたと考えられるようになった。すなわち「大藤原京」である。[6] 史料の面からは、天武朝に新たな都城の地を求める記事が初めて見えるのは天武五年（六七六）のことである。逆に雷紋縁軒丸瓦の年代観からすると、持統朝に藤原京が造営された後に小山廃寺が建立されたとすると、年代的に矛盾する。小山廃寺は天武朝造営とせざるを得ない。新たな都城の地を求める事業は天武天皇即位後直ちに始められ、それが「大藤原京」の地に求められ、間もなく条坊設定が行われた可能性を考えるべきではなかろうか。

小山廃寺は高市大寺として新たに建立され、後に大官大寺と寺名が改められた。しかしその寺が一般寺院と同じ規模であったために、文武朝に至って規模壮大な寺として建立されたと考えられるのである。しかし、そのように考えるには藤原京の条坊設定が天武朝初年に遡ることを証明しなければならない。雷紋縁軒丸瓦の年代観だけで片付く問題では決してない。

2　伽藍配置変化の要因

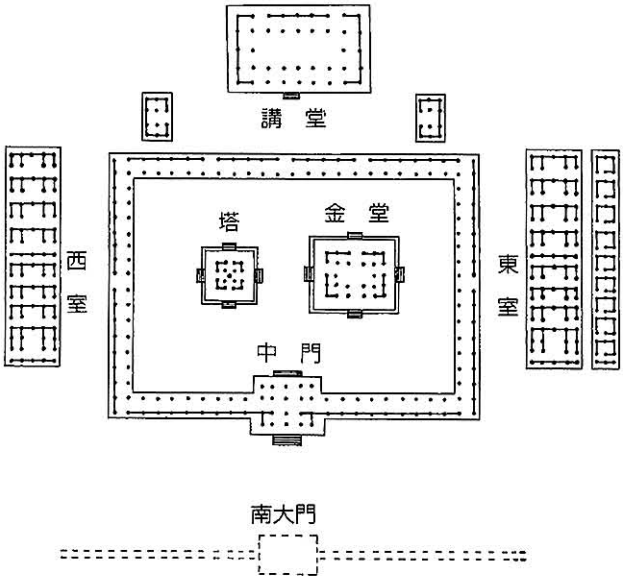
古代寺院における伽藍配置変化の要因に関しては『学叢』十三号に「わが国古代寺院の伽藍配置」として発表し、後に若干の補訂を加え『日本古代寺院造営の研究』に「伽藍配置変化の要因」として発表した。[7]

古代寺院の伽藍配置は、細部をとりあげれば千差万別とでも言えようが、伽藍中枢部とりわけ金堂と塔の配置に注目すれば六形態に分類できるとした。それらは、

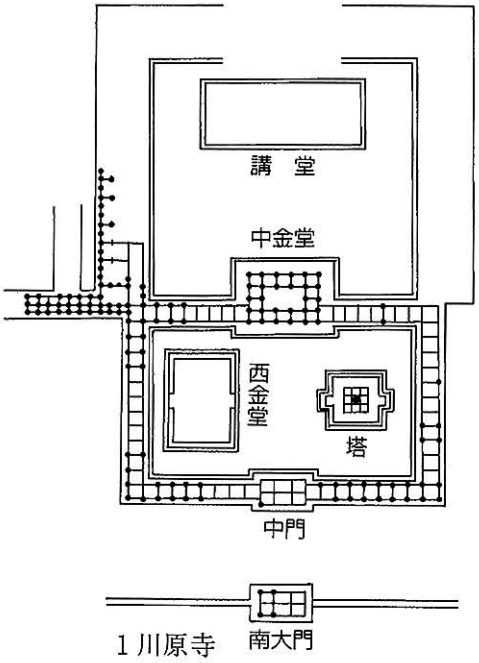
1　塔の東西と北に三金堂を配置する飛鳥寺式
2　塔と金堂を南北に配置する四天王寺式
3　金堂と塔を東西に配置する法隆寺式
4　塔に対面する形で南北棟の金堂を置く川原寺式
5　回廊内で金堂の前面に塔を二基配置する薬師寺式
6　二基の塔が回廊の南に置かれ、金堂院と塔院とがそれぞれ独立する大安寺式

の六形態である。

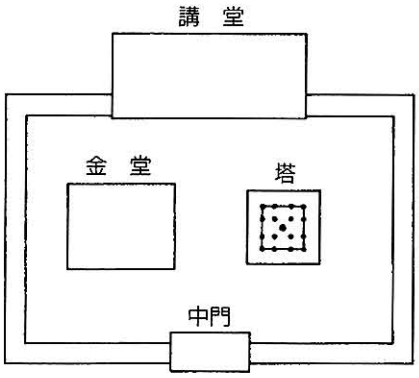
わが国の古代寺院が仏教施設であるからには、その堂塔の配置法にその時その時の仏教観が反映していること、そして古代における



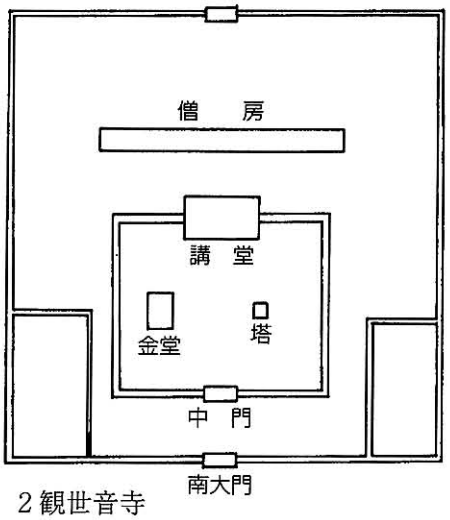
4 法隆寺



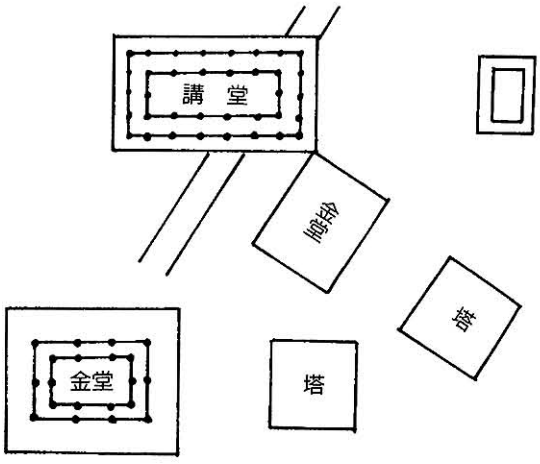
1 川原寺



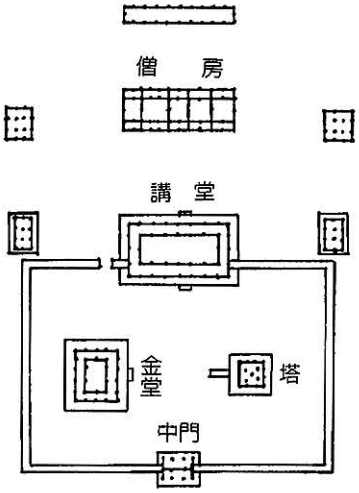
5 法起寺



2 観世音寺



6 穴太廃寺



3 多賀城廃寺

第2図　伽　藍　配　置　図

仏教が朝廷主導による面が強かったことからすれば、その伽藍配置の変化には朝廷の仏教観が反映した面が強いと考えたのである。しかし、川原寺式伽藍配置出現の要因については言及することができなかった。

この川原寺式伽藍配置に関しては、他にも解決しなければならない問題点がある。一つはその出現の年代である。川原寺は斉明天皇の菩提を弔うために天智朝に造営工事が開始されたものであり、天智朝でも近江遷都に至る前、すなわち天智七年（六六八）以前の創建と考えられている。川原寺のように、中金堂を伴わない観世音寺や多賀城廃寺も川原寺式伽藍配置の範疇に含めると、穴太廃寺第一次伽藍に注目しなければならない。穴太廃寺第二次伽藍の軸線は大津宮関連掘立柱建物の造営方位と一致するところから、近江遷都に伴って第一次伽藍を第二次伽藍に建て直したと考えられている。すると、近江遷都以前に川原寺式伽藍配置に近似した、塔に対面して南北棟の金堂を置く寺が存在したことになり、川原寺に先行してそうした伽藍配置をとる寺が営まれた可能性認められる。しかし一方で、天智朝に川原寺の造営工事が新たな伽藍配置で始められながら、大津京造営に伴って建て直された穴太廃寺がなぜ川原寺式伽藍配置を踏襲しなかったのかという疑問が生ずる。

金堂と塔が東西に配置される形態を、前稿では法隆寺式伽藍配置として一括りにした。それは、南北に塔と金堂を配置していたものを東西に置き換えるということが大きな変化と捉えるべきと考えたからである。そして東西配置のものは、金堂を東に、塔を西に置くものと、それとは逆に金堂を西に、塔を東に置くものとがあり、従来前者を法隆寺式、後者を法起寺式と呼んでいた。この両者では、法起寺式伽藍配置をとる寺が圧倒的に多く建立されたことが各地の発掘調査で確認されている。そうした状況からすれば、「法隆寺式伽藍配置」と「法起寺式伽藍配置」とでは仏教観の上から、どのような違いがあるのかという点を明らかにする必要があろう。

こうした金堂と塔が東西に配置される伽藍配置はわが国で成立したと考えられているのであるが、中国にすでに存在しており、その影響であるとの見解もある。すなわち川原寺や法隆寺のような伽藍配置は「礼仏中心に変貌した初唐伽藍へ移行する間の過渡的形式」[8]であり、塔中心から金堂中心に移行する間の過渡期の所産とする。さらに回廊によって塔・金堂を講堂や僧坊から区分する形は北魏太祖建立の寺やホータン王新寺に準ずるといった考えである。その場合、わが国に大きな影響を与えながら、朝鮮半島にこうした伽藍配置が広まらなかったことも問題点となろう。

薬師寺式伽藍配置に関しては新羅感恩寺の影響によることを力説した。感恩寺と薬師寺との堂塔配置の比率はほとんど誤差がないとする見解はきわめて説得力があり[9]、統一新羅における鎮護国家の思想の影響を天武朝廷が受けたことは確かなことと考えたからである。そして回廊内双塔式伽藍配置をとる寺は薬師寺をもって初源とすると述べたのであるが、河内善正寺の存在が大きな問題点として残る。善正寺は昭和二十四年に土取り工事のために消滅してしまったが、その際に調査が行われ、金堂・塔・中門・回廊・講堂などの規模が明らかにされている。注目すべきは金堂が二重基壇であり、下成基壇にも礎石を据えていたことが明らかにされたことである[10]。この寺の所用軒丸瓦は単弁有子葉八弁蓮華文を瓦当面に飾り、外縁には三重圏線をめぐらせている。この紋様構成は山田寺の系譜をひくもの

であり、中房が大きく作られているという面はあるが、薬師寺に先行する製品と考えられる。

3　「古新羅系軒丸瓦」の提唱

昭和六十三年に特別展覧会「畿内と東国」展を担当した。久しぶりの考古室担当の展覧会であったが、折悪しく東京国立博物館もその年に考古展が計画されていた。二つの国立博物館が同じ年に考古展を開催するとなれば、展示資料の選択に不都合が生じることは明らかである。そうした事態を避けねばとの、当時の上山春平館長の御助言を得て「瓦」中心の展覧会とすることになった。かねて瓦に関心を抱いていた私にとってはまたとない機会であった。「畿内と東国」の主題はすでにその前年に決まっていたので、変更はできない。したがって、一部に西日本の資料を含めたが、東国各地から八百点近くの瓦を集め、韓国からも百済と新羅の資料を借用した。第十室だけは施釉陶器を中心に展示したが、第一室から九室まで瓦・瓦・瓦であった。昭和六十三年は西暦一九八八年、すなわちわが国に瓦造りの技術が伝えられて丁度千四百年なのであった。『日本書紀』には瓦作りの技術者を「瓦博士」と表現している。一九八八年はいわば「瓦博士渡来千四百年」なのであった。この年の展覧会を考古室が担当することが決められたのは、京都国立博物館へ転勤した昭和六十年であったが、開催の年が「瓦博士渡来千四百年目」に当たろうとは、その時には思いもよらなかった。上山館長の御助言は、まさに天の声であった。

開催の翌年度は大型図録編集刊行の年である。開催期間中の毎月

3不明　2天恩寺　1臨海殿

6片岡王寺　5平等坊廃寺　4豊浦寺

第3図　古新羅の軒丸瓦（1～3）と古新羅系の軒丸瓦（4～6）

曜日には、奈良国立文化財研究所と京都市埋蔵文化財研究所の方々に協力していただいて瓦の実測図を作成、そしてほとんど毎晩金井杜男氏に写真撮影をしていただいた。そうした方々のおかげで『畿内と東国の瓦』[11]を刊行することができた。その図録には論文三本を掲載し、うち一本は私自身が「瓦当文様に見る古新羅の要素」と題して一文を掲載した。

わが国古代の軒丸瓦、とりわけ初期の軒丸瓦の瓦当紋様には百済の影響を受けたものが多く見られ、百済式あるいは百済系と呼ばれる。その一方で、百済の要素とは異なるものも見られ、それらは高句麗式、高句麗系と呼ばれている。百済系に関してはまさにそのとおりであって、百済直結ともいうべき紋様をもつものも見られるのであるが、高句麗系に関しては、この展覧会の史料を収集していくにしたがって疑問を感じるようになった。高句麗の瓦当紋様に直結とまではいかないまでも、よく似たものがないわけではないが、むしろ統一以前の新羅、すなわち古新羅時代の瓦当紋様に酷似した資料が目立つことが明らかになってきたのである。わが国古代の瓦当紋様で高句麗式、あるいは高句麗系と呼ばれる代表的資料は豊浦寺の軒丸瓦である。しかし、その資料そのものが古新羅の要素を濃厚に示しているのである。すなわち慶州月城の臨海殿出土資料と比較すれば、両者が酷似していることは明らかである。細い蓮弁、蓮弁の中央に一条の凸線をおくこと、弁間の状況が臨海殿出土例が楔状、豊浦寺出土例が珠紋という点で異なってはいるが、両者は共通点をもっていると言えよう。豊浦寺の他の資料には楔状の間弁をもつものもある。豊浦寺造営の段階、すなわちわが国での寺院造営の初期段階にすでに新羅から技術がもたらされていたことが明らかなのである。

瓦当紋様における古新羅の要素はすでに別稿で示しているが、ここで再確認しておこう。

1　蓮弁は無子葉であるが、蓮弁が幅広く作られるものと蕾状に先端を尖らせるものとがある。
2　蓮弁には凹弁に作られるものがある。
3　蓮弁は八弁が主流であるが、六弁で構成されるものがめだつ。
4　蓮弁に鎬というよりも縦に一本の凸線を入れるものがある。
5　蓮弁内にパルメットを入れるものがある。
6　中房が大きく作られるものがある。
7　中央内を放射状にいくつかに分割するものがある。
8　中房の周囲に溝をめぐらすものがある。
9　弁区と外縁との間隔が広く離れている。
10　外縁が幅広く作られる。

こうした条件をそなえているわが国の軒丸瓦をあげれば、3と4の要素をそなえるものとしては平等坊廃寺例があり、8の要素をそなえるものには新堂廃寺や片岡王寺例がある。5の要素をそなえるものとしては法隆寺若草伽藍例がある。このように古新羅の要素をそなえたものは、畿内以外にも数多く見ることができ、従来注目されることのなかった古新羅軒丸瓦の存在を強調したいのである。

地勢的に見て、百済と新羅は朝鮮半島の南半部に位置し、高句麗は北半部に位置している。わが国との通交は北半と比べれば、南半との方がより頻繁であった。また、新羅の軒丸瓦は百済と高句麗の両者の影響を受けた瓦当紋様なのである。確かに古新羅の瓦当紋様の中には高句麗の要素を強く受けたものが認められる。そうしたも

のがわが国にもたらされたものと考えるべきであろう。このことを強調しているからといって、高句麗の直接的要素を否定するものではない。高句麗系軒丸瓦も存在する。文化がもたらされるルートというものは決して一筋ではない。古代にもたらされた造瓦技術のうち、百済からのものが偶々『日本書紀』や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に記されたに過ぎないのである。飛鳥寺に初めて入った僧侶が百済僧慧聡、高句麗僧慧慈であったように、そして推古二十四年（六一六）に新羅から仏像がもたらされたことがあったように、朝鮮半島三国の影響がわが国古代の瓦当紋様にあらわれていることはごく自然のことなのである。ここに改めてわが国古代における「古新羅系軒丸瓦」を提唱したい。

まとめ

この研究随想では、古代寺院を研究するにあたっての、いくつかの問題点をとりあげようと考えた。三項目に終わってしまったが、述べねばならないことはまだある。官寺の造営に関して言えば、その伽藍配置にも問題点が存在する。飛鳥地域、そして藤原京から平城京に移ったとされるそれらの寺々の中で、前代と全く同じ伽藍配置で建立された寺が薬師寺だけであったのは、いかなる理由からなのであろう。文武朝廷、そして元明朝廷としては、薬師寺式伽藍配置こそがあるべき形と考えていたに違いない。それなのになぜ他の三か寺の伽藍配置を薬師寺式にしなかったのであろうか。そのような見解から、別稿で文武朝大官大寺造営に際して西塔を建立する意志があったと考えたのである。[12]

平城遷都に伴って建立された四官寺がいつ完成したのか、という点もある。それぞれの寺によって完成の時期は異なるのであろうが、『続日本紀』などにはそうした面の記事は見られない。元興寺の場合、塔の基壇内から「神功開寶」銭が出土している。「神功開寶」の初鋳は天平神護元年（七六五）である。元興寺では、塔の造営工事が天平神護元年以後に行われていたのである。平城京官寺の中で第三位の地位にあったとはいえ、平城遷都に伴って平城京鎮護の寺として造営工事が進められた寺であったはずである。そうした寺が遷都後半世紀を経ても完成していなかったのであろうか。こうした面も大きな問題点と言えよう。

本来藤原氏の氏寺であった興福寺については大きな問題点があり、このことに関しては別稿で述べた。別稿では興福寺前身寺院の存在をあたかも否定したかのような論調になったが、[13] 前身寺院の実態を解明しなければならないと考えている。

全く別の視点なのであるが、畿内制の成立を寺院造営の面から考えられないだろうか。これは、別稿で若干述べたのであるが、きちんとした結論を導き出すことができなかった。[14] しかし、『日本書紀』大化二年（六四六）正月詔の第二条には「凡そ畿内は、東は名墾の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭狭波の合坂山より以来を、畿内国とす。」と見える。ここに記されている四つの地名に関しては、従来の研究から「名墾の横河」は三重県名賀郡の名張川、「紀伊の兄山」は和歌山県伊都郡かつらぎ町の背ノ山、「赤石の櫛淵」は神戸市垂水区塩屋町付近、「近江の狭狭波の合坂山」は大津市の逢坂山と考えられている。これらの四か所は大和と伊賀の境に近い伊賀側、河内と紀伊の境の紀

伊側、摂津と播磨の境に近い播磨側、山背と近江の境に近い近江側である。それぞれの地域には七世紀後半に造営された寺跡があり、それらの寺々の建立と畿内制の成立との関連を検討していく必要があろう。

〈注〉

1 森　郁夫「古代山背の寺院造営」（『学叢』八号　一九八六年）。後に『日本の古代瓦』（雄山閣出版　一九九一年十一月）に再録。

2 「明日香村紀寺跡発掘調査概報」（奈良県教育委員会『奈良県遺跡調査概報一九七七年度』一九七八年）

3 小澤　毅「吉備池廃寺の調査」（『奈良国立文化財研究所年報』一九九七Ⅱ）

佐川正敏「吉備池廃寺の調査」（『奈良国立文化財研究所年報』一九九八Ⅱ）

4 森　郁夫「平城京における初期官寺」（法政大学出版局『日本古代寺院造営の研究』二一四頁　一九九八年）

5 森　郁夫「百済大寺　吉備池廃寺をめぐる問題点」（『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅰ　一五一頁　一九九八年）

6 小澤　毅「古代都市『藤原京』の成立」（『考古学研究』四三―四　一九九七年）

7 森　郁夫「わが国古代寺院の伽藍配置」（『学叢』十三号　一九九一年）

森　郁夫「伽藍配置変化の要因」（法政大学出版局『日本古代寺院造営の研究』一九九八年）

8 関口欣也「大陸建築様式の伝来」（『日本古寺美術全集』一　一九七九年）

9 岡田英男「薬師寺と感恩寺」（奈良国立文化財研究所「薬師寺発掘調査報告」『同研究所学報』四五　一九八七年）

10 藤澤一夫「河内埴生廃寺の調査」（大阪府教育委員会『大阪府の文化財』七〇頁　一九六二年）

11 京都国立博物館『畿内と東国の瓦』一九九〇年

12 森　郁夫「平城京における初期官寺」（法政大学出版局『日本古代寺院造営の研究』二〇三頁　一九九八年）

13 森　郁夫「官寺移建に関する諸問題」（『日本宗教文化史研究』六　二〇〇二年）

14 森　郁夫「畿内制の成立と寺院の造営」（法政大学出版局『日本古代寺院造営の研究』一九九八年）